

症例から学ぶ M タンパク検査 タンパク分画から免疫固定法まで

東田修二 著



本書を拝受し、一気に通読いたしました。全編、写真の配置を含めとてもわかりやすく、著者のお人柄（とても優しい先生です）が随所にうかがえます。

著者である東田修二先生は、血液専門医をベースにされた臨床検査専門医であり、本書には臨床的なセンスと検査医学のセンスが随所に散りばめられているのが特徴です。

本書は3部構成になっており、第1部「総論」ではMタンパクを呈する疾患がコンパクトに整理され、臨床的理解を助けてくれます。現在の主流である免疫固定法や、臨床で頻用されているFLC（遊離L鎖定量）検査がしっかりと解説されているだけでなく、著者が言及されているように、今後は施行頻度が減少するであろう「免疫電気泳動法」まで網羅されている点に、温かい配慮を感じます。もちろん、これからのMタンパク検査についても紹介されています。また、第3部「参考—Mタンパク以外の検査の見方—」では、多発性骨髄腫などで行われる他の臨床検査やX線検査を取り上げており、Mタンパクを起点とする検査の広がりが見られています。

何と言っても圧巻なのは、第2部の「症例集」

です。各症例（疾患）のMタンパク検査所見が見事にまとめられています。私自身、これまで数え切れないほどのMタンパク検査を経験してまいりましたが、症例との紐付けは決して十分とは言えず、このように確かな情報をまとめられたのは、まさに著者ならではの功績だと感じます。複数Mタンパクの例や、移植後のマルチバンドの出現、IgG4関連疾患など、典型的ではない症例が追加されていることも非常に参考になります。さらに、サイドコラムのQ & Aも秀逸で、特に「MGUSと診断された場合にどれくらいの頻度で経過観察すべきか」という問いは、多くの現場の臨床検査技師がまさに知りたいポイントです。

本書は表紙に銘打たれている通り、まさに「唯一のMタンパク検査の本」です。Mタンパク検査に携わる医師や臨床検査技師をはじめ、すべての医療従事者、そしてそれを目指す学生の方々にとって、最高の教科書になると確信しております。

（群馬パース大学 医療技術学部 検査技術科
教授 山田俊幸）

<AB版/104頁/定価6,600円（本体6,000円＋税10%）/
医歯薬出版/2026>